

サロベツ原野の鳥類・1961年

藤巻裕蔵

〒072-0005 美唄市東4条北2丁目6-1

Birds of Sarobetsu Moor, Northern Hokkaido in 1961

YUZO FUJIMAKI

Higashi 4, Kita 2-6-1, Bibai, Hokkaido, 072-0005 Japan

Abstract. Birds were surveyed in Sarobetsu Moor, northern Hokkaido in late June and early July 1961. A total of 26 bird species was recorded in the moor. In central part of the moor dominated by sphagnum only *Alauda arvensis* was main species. In western and eastern parts of the moor low shrubs are dominant plants and main bird species were grassland birds such as *Gallinago hardwickii*, *Acrocephalus bistrigiceps*, *Luscinia calliope*, *Saxicola torquatus*, *Emberiza aureola*. In forests with small shallow lakes and grassland of Wakasakanai 40 species were recorded. In forest and agricultural lands of Maruyama 19 species were recorded.

サロベツ原野は北海道北部にある湿原の一つで、日本最大の高層湿原域をもつことで知られているが、春に周辺の山や丘陵から融雪水が流れこむため洪水になることが多く、冠水した牧草地では牧草の成長が遅れるなどの問題があった（岡田・高橋，2007）。この問題を解決する目的でサロベツ川をショートカットする放水路の掘削が北海道開発局の事業として1961年の秋から始まり1965年に完成した。最初に放水路予定線の南側に作業用の排水溝が人力で掘削された（図1）。この放水路の完成後、周辺部の湿原では乾燥化により湿原の植物が減少し、クマイザサが増加し始めた（北海道開発局，1972）。当然、このような環境の変化により鳥類の生息状況も変化すると考えられる。放水路完成後における鳥類相の調査としては、1969、1970年の繁殖期における調査（北海道開発局，1972）と正富・富士元（1987a, 1987b）による1984年の秋・冬と1985年の繁殖期における調査がある。北海道開発局（1972）によると、1966年までの調査結果は「サロベツ総合調査概要」としてまと

められたとされているが、これは公表されていないようで、放水路が掘削される以前の鳥類相に関する公表された文献は見当たらない。

私は放水路に係る調査で、一調査員として1961年6月末～7月初めと10月下旬、すなわち放水路掘削前のサロベツ原野で鳥類の調査を行った。調査期間は短く、調査した場所も限られており、十分なデータとは言えない



図1. 1961年秋に始まった排水溝掘削。

Fig. 1. Excavation of drainage canal in autumn 1961.

が、放水路掘削前の鳥類相に関する一資料なので、記録に残っている繁殖期における調査の結果を報告する。

調査地、調査時期、調査方法

調査地は次のとおりである。

調査地A：サロベツ原野では東側の落合から西側の豊徳のサロベツ川にかかる開運橋までの約4.5km。落合付近ではハンノキ (*Alnus japonica*) やシラカンバ (*Betula platyphylla*) などからなる小規模の落葉広葉樹林がある。ここから約700 m (A1区) はイソツツジ (*Ledum palustre*)、ツルコケモモ (*Vaccinium oxycoccus*)、ヤチヤナギ (*Myrica gale*) などの低灌木のある湿原であるが、次第にエゾカンゾウ (*Hemerocallis middendorffii*) またはワタスゲ (*Eriophorum vaginatum*) が目立つようになる (図2)。それに続く中央部の約3km (A2区) はおもにミズゴケ類 (滝田 (1999) によると、サロベツ原野では10数種のミズゴケが確認されている) からなる高層湿原である (図3)。とくに中心部は、歩くと足が沈み、跳びはねると半径5 mほどの範囲がゆらゆらと揺れるような状態であった。西側の開運橋付近の川沿いにはヨシ (*Phragmites communis*) やクマイザサ (*Sasa senanensis*) が見られるが、ここから約800 m (A3区) はA1区とほぼ同じ植生である。なお、各調査区の距離は歩行に要した時間から算出した。

調査地B：稚咲内の砂丘列で、海岸側から砂丘草原、風衝型カシワ (*Quercus dentata*) 林、針広混交林となっており、砂丘列間にはいくつかの沼がある。

調査地C：丸山は針広混交林と農耕地である。

調査を行ったのは、調査地Aでは1961年6月28、29日、調査地Bでは6月29、30日、7月1、2日、調査地Cでは6月30日である。

調査地Aでは調査路の片側50 mずつ、両側で100 mの範囲で観察された種と個体数を記録し、その範囲外で観察された場合には種だけを記録した。調査地B、Cでは歩くルートを決めずに歩き、一部の種を除き観察された種だけを記録した。

結果と考察

調査地Aでは1961年6月28日の8:30～11:30



図2. エゾカンゾウが優占するサロベツ原野西部。
Fig. 2. Western part of Sarobetsu Moor dominated by *Hemerocallis middendorffii*.



図3. ミズゴケ類が優占するサロベツ原野中央部。
Fig. 3. Central part of Sarobetsu Moor dominated by sphagnum.

に開運橋→落合、12:15～15:45に落合→開運橋で調査したが、28日の午後には鳥類の活動が不活発になり、観察できる種が非常に減少していたので、A1だけの調査である。29日には7:15～10:30に開運橋→落合で調査した。調査結果を表1に示す。

調査地AのA1区ではカッコウ (*Cuculus canorus*)、オオジシギ (*Gallinago hardwickii*)、ヒバリ (*Alauda arvensis*)、コヨシキリ (*Acrocephalus bistrigiceps*)、ノゴマ (*Luscinia calliope*)、ノビタキ (*Saxicola torquatus*)、ホオアカ (*Emberiza fucata*)、シマアオジ (*Emberiza aureola*) といった草原性鳥類がおもに観察された。このほか落合に小規模の林があったため、キジバト (*Streptopelia orientalis*) やムクドリ (*Spodiopsar cineraceus*) も

観察された。

A2区では観察された鳥類は非常に少なく、ヒバリが非常に多かった。ここで記録された種のうちトビ (*Milvus migrans*) とハシボソガラス (*Corvus corone*) は上空を通過したものであり、6月29日のシマアオジ5羽のうち4羽はA3区近くになって記録されたので、A2区では実質的にヒバリだけが生息するといつてよい。

A3区ではA1区の草原性鳥類とほぼ同じ種が観察された。A1, A3区では、現在生息数が非常に減少しているシマアオジの相対優占度が12~26%と高かったのは興味深い。

1970年6月に行われた調査では、ミズゴケが優占し植生が貧弱な湿原中央部でもヒバリのほか、シマアオジとマキノセンニュウも多く、植生が密で草丈も高くなると種数も増加した(北海道開発局, 1972)。1961年にはミズゴケが優占していた中央部ではヒバリしか生息していなかったのに、このような状況は1970年にはすでに消失していたようである。1985年6月に行われ

た調査では、湿原中央部の「湿原ライン」区では10種の鳥類が記録され、このうちヒバリ、ノビタキ、シマアオジが優占していた(正富・富士元, 1987b)。ノビタキは営巣条件として巣の上を70%以上を覆う植被が必要なので(藤巻, 未発表)、この種が優占種になるということは、草丈の高い草本がかなり生育するようになっていたことを示唆し、湿原中央部が1961年のA2区のような状況とは異なっていたことを示している。

稚咲内の砂丘では、ツツドリ (*Cuculus optatus*)、キツキ科やシジュウカラ科の鳥類、コマドリ (*Luscinia akahige*)、キビタキ (*Ficedula narcissina*) などの森林性鳥類、シマセンニュウ (*Locustella ochotensis*)、ノゴマ、ホオアカなどの草原性鳥類のほか、マガモ (*Anas platyrhynchos*)、キンクロハジロ (*Aythya fuligula*)、ミコアイサ (*Mergellus albellus*)、カワセミ (*Alcedo atthis*) といった水域のある環境に生息する種も含め40種が観察された(表2)。これらのうちミコアイサについては雌と幼鳥の家族群が観察され、繁殖していることが確認された(阿部ら, 1961)。この観察例は日本におけ

表1. サロベツ原野における繁殖期の鳥類。括弧内は相対優占度(%)。

Table. 1. Birds of Sarobetsu Moor during breeding season. Figures in parentheses indicate relative abundance (%).

種名	6月28日				6月29日		
	午前		午後		A1	A2	A3
	A3	A2	A1	A1			
ウズラ <i>Coturnix japonica</i>	2(10)						
キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>			1(4)				
カッコウ <i>Cuculus canorus</i>			1(4)	2(9)	1(4)		
ハリオアマツバメ <i>Hirundapus caudacutus</i>	2(10)			1(5)			
オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>	3(14)			1(5)	1(4)		4(27)
トビ <i>Milvus migrans</i>		1(3)					
アカモズ <i>Lanius cristatus</i>			2(8)	2(9)			
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	2(10)	3(10)			2(9)		
ヒバリ <i>Alauda arvensis</i>	2(10)	26(87)	4(15)	1(5)	1(4)	25(83)	3(20)
マキノセンニュウ <i>Locustella lanceolata</i>			1(4)				
コヨシキリ <i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	1(5)		1(4)	2(9)	2(9)		
ムクドリ <i>Spodiopsar cineraceus</i>			4(15)	4(18)	1(4)		
ノゴマ <i>Luscinia calliope</i>			1(4)		1(4)		
ノビタキ <i>Saxicola torquatus</i>	1(5)		5(19)	5(23)	3(13)		1(7)
ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>			1(4)				2(13)
カララヒワ <i>Chloris sinica</i>							1(7)
ベニマシコ <i>Uragus sibiricus</i>	2(10)						
ホオアカ <i>Emberiza fucata</i>	2(10)		1(4)	1(5)	4(17)		1(7)
シマアオジ <i>Emberiza aureola</i>	4(19)		3(12)	3(14)	6(26)	5(17)	
アオジ <i>Emberiza spodocephala</i>			1(4)		1(4)		3(20)

表2. 稚咲内と丸山における繁殖期の鳥類.

Table 2. Birds of Wakasakanai and Maruyama during breeding season.

種名	稚咲内	丸山
マガモ <i>Anas platyrhynchos</i>	○	
キンクロハジロ <i>Aythya fuligula</i>	○	
ミコアイサ <i>Mergellus albellus</i>	○	
キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>	○	○
ツツドリ <i>Cuculus optatus</i>	○	○
カッコウ <i>Cuculus canorus</i>	○	○
ハリオアマツバメ <i>Hirundapus caudacutus</i>	○	○
オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>	○	
ノスリ <i>Buteo buteo</i>	○	
カワセミ <i>Alcedo atthis</i>	○	
アカゲラ <i>Dendrocopos major</i>	○	
クマゲラ <i>Dryocopus martius</i>	○	
モズ <i>Lanius bucephalus</i>	○	
アカモズ <i>Lanius cristatus</i>	○	
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	○	○
ヒガラ <i>Periparus ater</i>	○	
シジュウカラ <i>Parus minor</i>	○	○
ヒバリ <i>Alauda arvensis</i>	○	○
ウグイス <i>Cettia diphone</i>		○
ヤブサメ <i>Urosphena squameiceps</i>	○	○
エナガ <i>Aegithalos caudatus</i>	○	
エゾムシクイ <i>Phylloscopus borealoides</i>	○	○
センダイムシクイ <i>Phylloscopus coronatus</i>		○
マキノセンニュウ <i>Locustella lanceolata</i>		
シマセンニュウ <i>Locustella ochotensis</i>	○	
エゾセンニュウ <i>Locustella fasciolata</i>	○	○
コヨシキリ <i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	○	○
ムクドリ <i>Spodiopsar cineraceus</i>	○	○
コムドリ <i>Agropsar sturninus</i>	○	○
クロツグミ <i>Turdus cardis</i>	○	
アカハラ <i>Turdus chrysolaus</i>	○	
コマドリ <i>Luscinia akahige</i>	○	
ノゴマ <i>Luscinia calliope</i>	○	
ノビタキ <i>Saxicola torquatus</i>		
キビタキ <i>Ficedula narcissina</i>	○	○
ニュウナイスズメ <i>Passer rutilans</i>	○	
スズメ <i>Passer montanus</i>	○	
ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>	○	○
カララヒワ <i>Chloris sinica</i>	○	○
ベニマシコ <i>Uragus sibiricus</i>	○	
イカル <i>Eophona personata</i>	○	
ホオアカ <i>Emberiza fucata</i>	○	
シマアオジ <i>Emberiza aureola</i>	○	
アオジ <i>Emberiza spodocephala</i>	○	○

るミコアイサの繁殖の初めての記録で、この事実に基づき、日本鳥類目録改訂第4版（日本鳥学会、1958）まで冬鳥とされていたミコアイサが、改訂第5版（日本鳥学会、1974）以降は北海道北部で繁殖とされるようになった。

丸山では、稚咲内の砂丘で観察された草原性や森林性の鳥類の一部のほか、ウグイス（*Cettia diphone*）が加わり、19種の鳥類が記録された（表2）。丸山に比べて稚咲内で記録された鳥類の種数が多いのは、調査日数が多かったこと、調査地の範囲が広がったこと、砂丘列の間に沼があり環境が多様であったことによると思われる。

文献

- 阿部永・小林恒明・藤巻裕蔵、1961. 北海道稚咲内におけるミコアイサの蕃殖. 鳥, 16: 420-422.
- 北海道開発局, 1972. サロベツ総合調査報告書, 泥炭地の生態 VII 生物部門. 北海道開発局. 札幌.
- 正富宏之・富士元寿彦, 1987a. 北海道北部サロベツ原野の鳥類相 I. 秋冬期の鳥. 専修大学北海道短期大学紀要 (自然), 20: 235-251.
- 正富宏之・富士元寿彦, 1987b. 北海道北部サロベツ原野の鳥類相 II. 繁殖期の鳥. 専修大学北海道短期大学紀要 (自然), 20: 253-280.
- 日本鳥学会, 1958. 日本鳥類目録改訂第4版. 日本鳥学会. 東京.
- 日本鳥学会, 1974. 日本鳥類目録改訂第5版. 学研. 東京.
- 滝田謙譲, 1999. 北海道におけるミズゴケの分布及びその変異について. *Miyabea*, 4: 1-84.
- 岡田操・高橋英紀, 2007. サロベツ原野—低地の湿原②. 辻井達一・岡田操・高田雅之(編著), 北海道の湿原: 40-47. 北海道新聞社. 札幌.